

INK RED

written by HADEYA

カルト皆殺し小説

1、デビューしたくて

つい、ニヤニヤしちゃう。言っておくが、顔の筋肉が緩んでるんじゃないぜ。歯止めが効かないんだ、俺って男は。笑いが止まらない。笑い過ぎて、つい涙が出ちゃう。だってよ、だってよ——

「だってよ、こんな笑える話はないぜ。質屋に行っても、サトウヨカドーに行ってもな」

俺は言った。と思うと、急に笑いが醒める。超一流の理性が俺を抑えようとするからだ。こう言う時は、じっと待つ。音楽が高鳴るのを。そして突然、フッと動く。武器を手に背後に回る。愉快だ。もう我慢できないぜ。

「ふうん、俺には分かる。お前が今、何を感じてるか」

探る。一体、お前は何を感じている？

「痛烈な恐怖、同時に高鳴るエクスタシー。違うか？」

「お、お助け下さい……」

笑った。腹を抱えて笑った。川原の前、橋の下。闇の中でショーは行われている。リンチは。リンチと言っても映画監督の事じゃあないぜ。

「我慢できないんだ。本当に我慢できない。そして、ブツ放すんだ。俺の全てを」

「お金なら払います……ですから……ですから、お助け下さい」

登山はクライマックスへ向かう。ピストン運動が絶頂に達するように。

「そろそろ、行くぜ」

俺はカバーを外した。銀色のボールペンに装着された特殊なカバーを。ボールペンのブランド名は、〈テックス〉。

「行く行く、行っちゃう。まるで安物ポルノだ。けど、こいつはポルノじゃない。何だと思う？」

「お、お願いします、命だけは……命だけは……」

テックスでブツ刺した。おぞましい悲鳴が橋の下をツン裂く。

……こうして物語は始まった。川原の前、橋の下。俺の名は、ドS。職業、売れない小説家。これは俺が初めて描く、〈ウルトラ暴力小説〉である。

2、一丁目

サツに捕まった。採血され、意識を失った。意識を戻すと全身拘束され、監禁されていた。紙おむつを履かされて。連中は俺を監禁するつもりだろう。

記憶の断片が蘇る。看護婦に囲まれ、俺はストレッチャーで運ばれている。看護婦は俺の聖域に導尿を施している。

さっきまで精神病院にいた。今は隔離病棟にいる。どこまでが現実で、どこまでがアンリアルか区別が付かない。諭した——ここが死後世界である事を。ここは地獄の一丁目だ。

夜な夜な精神安定剤で脳をグチャグチャにされた。大量の電気ショックを受け、失禁する。人里離れた山奥。家族は俺を見捨てた。

怒りが込み上げる。静かに、燃えるように。マグマが宿り、心の底にマントルが形成される。

脱走する決心をした。決行は明日。次のチャプター。

連中は気付いていない。院内はボールペンが持ち込み可能である事を。俺が既にテックスを手に入れた事も。

脱走したら。その後は……見てやがれ。

暴力は暴力を生む。それを食い止める事が出来るのも暴力である。

……分からせてやる。連中に。小学生でも理解できるよう分かり易く、説明してやる。さあ、授業の始まりだ。余りにも強烈な授業———数学から入るとしよう。

3、再出頭

恋仲になった。看護婦と。看護婦の名は冴子。冴子はデートの為、俺を脱獄させてくれた。冴子は俺を愛している。夢中だった。

「私、しちゃ行けない事をしちゃった」

「報酬は弾むぜ」

俺は言った。ボールペンのように猛ったペニスを突っ込みながら。やがて射精した。冴子の奥に。後に冴子が生む俺の子はモンスター。伝説のモンスター、テックス・ドラゴン。

*

ハンバーガーを頬張り、道を歩く。季節は一月中旬。真冬。寒かった。記録的な寒波が続き、強烈に寒かった。

凍て付く吹雪が俺を高める。冴子の膣奥でテックス・ドラゴンが育って行く……。

「さて」

ごちた。警察へ出頭した。逮捕され、採血を受け、山奥の精神病院で目が覚める。紙おむつを履かされながら。俺は———

潜入開始。

4、勝呂元博との会話

監視カメラを見る必要はない。院内の喫煙所は監視されていないからだ。まずは必要な人材をヘッドハントする。

目を付けたのは〈勝呂元博〉。対警察勢力の愚連隊———馬路警備隊の元リーダー。覚醒剤所持で逮捕され、この病院へ連れて来られた。この病院に来たと言う事は何か後ろめたい過去があるのだろう。

病院に来て間もなく、元博は暴れた。天井の蛍光灯を叩き割り、看護婦を人質に取って脱走した。無賃乗車のタクシーで渋谷警察署へ殴り込み、担当刑事を脅迫した——俺を出せ、と。元博は再逮捕され、この病院に戻って来た。既に九年間、監禁されている。精神安定剤の服作用でブクブク太ったが、眼光は微かに輝いている。院内で音楽を聴く事が許されているから、だ。元博の病室はCDで溢れ返っている。元博は元ミュージシャンでもあった。モダン・ヘヴィネスが好きなようだ。楽曲を聴かせて貰った。お世辞にも良い出来とは言えなかったが、光るモノはあった。

「諦めた方が良くよ、秋留さん」

秋留さん——俺の実名。秋留善行。

「諦めねえさ」

俺は答えた。〈計画〉を、さり下なく振る。

「勝呂さんだって、諦めていないだろう」

「とくに諦めたよ。この病院に来たら良い子にした方がいい」

「それでいいのか？」

俺の目付きが鋭くなる。俺は続けた。

「本当に、それでいいのか？」

煙草を吸いながら元博は話をはぐらかせようとしている。逃がさない。俺は決して逃がさない。

「勝呂さんのCDのオープニング・トラック、結構、来たぜ。ソフトなイントロがラウドに変わるらへん。中々、来た」

「そうか……」

「ソフトなイントロがラウドに変わる。当時はそう言う曲が流行ってた」

「だよな」

「俺はあの流行が好きだった。最高にクールな時代だったよな？」

「俺もそう思う」

元博が煙草を消そうとする。間髪入れず、本題に入る。

「計画があるが、噛むか？」

「やめとく。俺は何も聞いてねえ」

「聞いたろう。たった今」

元博が俺の目をチラ見した。無言の間が続く。切り出したのは俺だった。

「シャバの空気は最高だったぜ」

「だろうな」

「ここからは一方的に喋る。勝呂さんが聞いても聞かなくても。計画名は、フルスイング。脱獄計画だ。計画の概要はこうだ」

突然、俺は灰皿を掴んだ。金属製の背の高い灰皿を。そいつでガラスのドアを叩き割り、そのまま砕けたガラスの上をスリッパで歩く。ユックリと。だだっ広い室内の中央に向かった。

警報が鳴り響く。緊急サイレンが院内をツン裂く。元ラグビー選手の恰幅の良い男性看護師が駆け付ける。連中は気付いていない。俺の衣服の首元にテックスが装着されている事に。

「落ち着いて、秋留さん！」

男性警備員の数が増えて行く。野次馬の患者が逃げて行く。今、俺は囲まれている。連中に。逃げ道はない。

「それでこそそのディフェンス。アート・オブ・セルフディフェンス」

俺は言った。テックスを掴み、ノック・エンドをワンノックした。

「落ち着いて、秋留さん！」

言いながら連中が徐々に俺との距離を縮めて来る。

「分かった分かった、言う通りにするよ。落ち着く。人生が落ち付くように俺も落ち着くってば」

テックスを付近に放り、跪いた。

「今だ！」

ラグビー野郎が怒鳴った。一斉に連中が牙を剥く。テックスを引っ手繰り、ラグビー野郎の首に突き立てる。

「今だ！」

今度は俺が叫んだ。誰に向かって叫んだか。……それがソフトなイントロ。ここからラウドなデイスティーション・ギターが流れ込み、サビへ向かって突き進む。その筈だ。

勝呂元博はまだ動かない。俺は女性看護婦を人質に取った。徐々にボルテージを上げて行く。

勝呂元博はまだ動かない……厳密には動けないのだ。

動かないから動かすまで、だ。理性を崩壊させる。野獣を院内に解き放つ。覚醒剤所持で逮捕された、対警察勢力の愚連隊——馬路警備隊の元リーダー、勝呂元博を。

5、蛍光灯を叩き割る

「元博！ それでいいのか！」

俺は叫んだ。背後の喫煙所に向かって。正面を向いたまま。

「このまま行けば、枯渇だぞ！ かつての自分はどこに行った！ あの流行を忘れたのか！」

俺は真剣だ。100パーセント、真剣だ。

「人質は取った！ 看護婦の佐々木さんだ！ 連中がこの先、何をしよう！ 何をしよう！！！」

背後でガラスを踏む音がする。足音が接近して来る。勝呂元博が動いたのだ。

「さっさと逃げよう」

「行くぞ！」

俺の肩を掴み、元博は俺を静止した。

「そっちじゃない。エントランスは警官が塞ぐ」

「どこに行けばいい！」

「俺の部屋だ。エントランスのドアを叩き割るんだ。灰皿で」

「逃げたと思わせ——」

「籠城する。部屋には小さな窓とダクトがある。それで催涙ガスを逃がすんだ」

考える。もっと手っ取り早い方法がある。

「もっと手っ取り早い方法があるだろう」

「そんな事をしたら……」

「したろう。過去形だ。そこを見ろ。床に蹲っているラグビー野郎を。血を撒き散らしながら痙攣してやがるぜ。ピクピク。ざまあねえだろう」

野郎の腹を蹴り上げた。

「本気か？」

「ああ、本気だ。100パーセント、俺は本気だ。人質を取ったら、次にすべきは何だ？ 元博、お前は分かってる筈だ」

「……人質にドアのロックを解除させる」

「その後は？」

「タクシーを奪って——」

「渋谷警察署に殴り込む。じゃねえのか？」

フラッシュバックする。元博の中で過去の記憶がフラッシュバックする。心の奥底でメカニックが形成されて行く。人は決して自分に嘘を吐けない。

「急ごう」

俺は手荒く看護婦の後ろ髪を掴んだ。

「さっさと歩け。エントランスのロックを解除するんだよ」

「わ、私はパスコードを知りません！」

「知ってるじゃねえか」

「本当に知らないんです！」

テックスの先端を見せ付ける。看護婦の右目に。カチカチカチカチ、ノック・エンドをノックする。

「片目にしてやろうか？ 両目でもいいがな」

「わ、分かりました！ 言われた通りにします」

「そう。お前は俺たちに脅されて仕方なく、ロックを解除したんだ」

看護婦の背中を蹴った。後ろ髪を掴み、再び立たせる。

「さっさと歩け！」

こうして俺と元博は脱走した。通りすがりの通行人から衣服を奪い、無賃でタクシーに乗り、渋谷警察署前へやって来た。ターゲットの名は大谷哲治刑事。

奇襲でリボルバーの拳銃を強奪した。そいつは捜査二課にいた。右足を撃ち、動けなくした。テックスを首筋に突き立て、止めを刺した。

それから俺たちは分散行動を取った。元博にアジトへの避難経路を示した。

「ここに潜伏すればいいんだな？」

「ああ、冴子って言う女が待ってる。スッゲー、淫乱だよ」

「ありがとう」

早速、俺たちは行動を開始した。テックスをカチカチ、ノックしながら。

野獣が解き放たれた。メカニックは確立に向かっている。暴力で俺たちは突破した。抑え付けようとする理性に対し。このままサビに向かって突き進む。サビの後はクライマックスが待っている。本当の始まりはこれから、だ。

一騎打ち——俺の美学の威信を賭けた闘いが間もなく始まる。天気予報では週末は大雪だ。

風も強く、警報級の吹雪になると言う。

嵐が来る。本当に来る。未だかつて体験した事のない、真冬の嵐が。

6、淫乱女、冴子

冴子が動いた。軽やかな足取りで。全身スキップ気分。馬路警備隊の元リーダーと犯りまくったんだから当前でしよう??? はいは〜い、みたいな(笑)。

歩きながら冴子は煙草に火を点けた。超一流の使い捨てライターを高級バッグにしまい、周囲を見回す、絶妙のタイミング。

動物みたく、パコパコしちゃった。秋留さんと。勿論、3P。相手のニーズに応えるって、素敵。いつけない、一線を越えちゃった(笑)。

冴子の足取りは軽い。軽くて軽くて風船のよう。ウキウキ気分が高輪台を目指す。私をメチャメチャにした男——浦山景春を消す為。

「ところで——」

唐突に冴子は独り言を始めた。病気気分で。

「——計画が何か分かる？」

言う訳には行かない。だから乳首を左右に揺らす。揺れ動く私の感情みたいな。冴子は流行のポップスをハミングした。武器である口で。

武器の名は、二枚舌。通称、卑猥な肉体。

7、一瞬の光

京浜東北線に乗った。座席で宙を眺めながら考える。浦山景春の事を。私の人生をメチャメチャにした男、浦山は私に何をしたのか。

答え＝何も。

ただマンションで会話しただけ。その時、一瞬、光を見たの。ピカッと白い光が室内に光って……そこで記憶が飛んでるの。翌朝、目が覚めると自宅にいた。けど身体の端々が痺れる訳。

一体、浦山は私に何をしたの？

怖くなって、戸籍を変えた。家族が自殺し。それでも痺れは消えない。未だに消えないの。

それどころか痺れは身体中を這い蹲ってる。一体、浦山は私に何をしたの???

私は答えを知っている。夢で見た事があるからだ。けど、それを言う訳には行かない。計画が頓挫するからだ。

今は計画に集中する。秋留さんが立てた〈フルスイング計画〉に。
ペットボトルの茶を飲みながら、冴子はそんな事を考えていた。

8、ARE YOU READY ?

浦山景春のマンション前に到着した。歩きながらスマートフォンで電話を入れる。
「もしもし、沢松です……看護婦の……力になって頂けると助かります」

エントランスは合鍵で通った。不審者に思う者はいない。
エレベーターに乗り、ボタンを押した。掌は不自然にジっとり汗ばんでいる。天井の防犯カメラを見た。事が起きるのを待ち切れない。一分一秒が拷問のような長さだった。
やがて9階へ到着した。フロアを歩き、909号室——浦山の住居を目指す。心臓はバクバク跳ねている。興奮を抑えられない。抑えられないモノは抑えられないのだ。

909号室の前に着いた。深呼吸をしてインターフォンを鳴らす。一つ息を吐いた。鍵を開ける音と共にドアが開いた。中から出て来た、浦山景春は言った。
「入れ、19号」
お邪魔します。挨拶しながら室内に入った。背後でドアが閉まる。もう逃げ道はない。ケツに火が点いたら最後。突っ走るしかないのだ。

こうして計画が始まった。

*

野獣——勝呂元博が動く。台所でビール瓶をカチ割る。
警察が訪れるのは時間の問題。冴子さんに言われ、武器……ビール瓶を入手した。悔いはない。未練も何もかも。

元博は警官を殺すつもりでいた。生まれて初めての殺人。当然、警官殺しが何を意味するかは知っている。〈絶望〉を与える。それが目的。連中が山奥の病院で俺に与えたよう、絶望を与える。その味を俺は良く知っている。

黄色い小便の味。たった今、飲んだビールの味だ。

刃先の尖ったビール瓶を置き、冴子から譲り受けたスマートフォンで通報した。
「通報です……脱走犯の勝呂元博容疑者を目撃しました……彼は今——」
きっぱり告げた。俺からのラブ・コール。そして宣戦布告。
「——江東区、四畳半のアパートに出入りしています」

9、スリル中毒

秋留善行は知り合いの売人からトルエンを購入し、沁み込ませたティッシュを丸め、ビルの屋上で吸引した。

安全運転を心掛けよう。

それから売人の運転するオートバイの後部座席に乗った。国産のオートバイで最高速度は時速300kmを超えるそうだ。オートバイの事は詳しくないが、売人が自慢気に語っていたのを覚えている。

後日談だが、売人とは知人の結婚式で再会した。彼の頬はコケ、ゲツソリ痩せていた。骨と皮の蓋骨。

中毒は極端に痩せる傾向がある事を俺は知った。

*

計画は目前であり、俺たちは実行の時を待っている。

ある者は祈り、ある者は言葉を失う。

計画とは何か。秋留善行、絶望、冴子は時を待っている。静かに、水面下で行動している。

遂に実行の時が来た。前代未聞のフルスイング計画実行の時が。

焦らすのは止めよう。ここから先は……一気に行くぜ。一気に、逝くぜ。

*

909号室———契約書に署名した。浦山は表情を一つ変えない。冴子が浦山の表情を覗く。持って生まれた才能である〈バトル・スカウター〉が作動する。

「私、バトル・スカウターを持ってるの」

「バトル・スカウター？」

「スカウターに寄れば、貴方は変態」

「……お前、沢松じゃないな？」

「冴子、よ。秋留善行親衛隊、特攻隊長」

言いながら変身した。得体の知れない〈何か〉に。全身を痺れが突き抜ける。浦山の表情が豹変する。

浦山の言葉は言葉にならない。

「な、な……」

……これで良いのだ。王座に座るのは、秋留さん。彼こそが王に相応しい。王座に座るのは秋留さんしかいない。

絶対に。

*

警察の一団が江東区の四畳半のアパートに突入した。元博は狭い居間の室内で胡坐を掻いて座っている。

元博———絶望は告げた。

「待ってたよ、あんたらが来るのを。9年間、待ち続けた」

*

秋留善行は売人から借りたオートバイで一般道を走行している。速度が上がって行く。グングン、グングン上がって行く。いよいよ計画実行だ——

お待たせ。

10、高速で、ラブ・ストーリー

浦山は逃げている。路地を全力疾走で。一体、何が起きたのか。

浦山は思った。連中が来る、連中が……。頭がグルグル回る。とにかく今は逃げるしかない。そう思った矢先、目の前に〈あれ〉が現れた。

ヒュウン。風音がする。

ヒュウン。未だ見た事のない【滑らか系】のクリーチャーが襲う。文字通り、滑らかなカーブを描きながら。か細い手足で貴方を抱きながら。

高輪三丁目交差点の真ん中で連中は踊っている。見た事のない奇妙な動きで。

浦山は逃げた。後ろを振り返らず、全力で。連中から逃れる為に。街は連中で一杯になっている……。

背後から抱き付かれた。か細い手足でデリケートに。どこに目があるか分からない。だが確かに、そのクリーチャー……冴子は私を見ている。

何故か気持ち良かった。初恋気分でメロメロになって……か細い指先がペニスの先端に侵入する。ヌルヌル質感でクネクネしている滑らかな、その動き。

俺は知った。女の味を。神経直結によって。

こんな噂がある。最近、日本のポルノ業界で催眠術が流行っている、と。誰もが口を揃えて言う。家畜用排卵促進剤が原因だ、と。私はそうは思わない。真相は日本中の女が知らない間に犯されている事実。行為はビデオ撮影され、動画配信サイトで安値販売される。

浦山は真相を知っている。何故なら〈首謀者〉だからだ。表向きの浦山の役職は出版社の取締役。裏の顔は……支配者。

浦山は自社で粗悪な紙に印刷された低俗なマンガ週刊誌を出版している。支配者になるのは簡単だった。通勤通学の電車内で自社の粗悪雑誌を見せるだけ。皆、雑誌を購入するだろう。薄利多売で売り上げはガツポガツポ、入って来る。そうやって裏社会の王になった。業界で浦山景春の名を知らぬ者はいない。いるとすれば、潜りだ。

儲けた金で浦山は第二の事業を始めた。人様には言えない事業……つまり人身売買。女を厳選し、製薬会社と秘密裏に開発したバイオ兵器を体内に埋め込む。〈モル〉と呼ばれる商品の女は共通して体内の〈痺れ〉を訴える。痺れの正体は神経を侵食するバイオ・エネルギー。こうして、か細い肉体を持つ神経生物〈滑らか系〉が誕生する。

夜な夜な、浦山は滑らか系にモルを強姦させる。受精させ、催眠光を見せて記憶を抹消する。そうやって19号が覚醒し、冴子に化けたと言う訳だ。

今、浦山の全身には〈滑らか系〉が巻き付いている。滑らか系は浦山の前頭葉にストローを刺し、語り掛けている。愛する為、浦山はストローで吸われ、背後からデリケートに抱かれている。しなやかに回転しながら。

浦山——私はイキまくった。か細い手足で何度も何度も。君は求める——濃いピンクの得体の知れない物体を。感極まって、私は泣く。身悶えしながら。

「愛してくれ、もっと激しく愛してくれ！」

言いながら私——浦山は射精した。射精しながらクリトリス化した全身の毛穴から潮を噴き、絶頂を迎えた。

11、同じ頃、江東区では

ビール瓶を刑事の首に突き立てた。返り血を浴び、元博の顔が赤く染まる。元博は窓から飛び降りた。

四畳半のアジトから逃走して間もなく、追手が来た。ビール瓶を手に逃げて行く。俺が向かう先は秋留さんの計画に寄れば——

前方をパトカーが塞いだ。後方も。袋の中の鼠だ。

「動くな！ 武器を捨てろ！」

捨てない。捨てて溜まるか。

警官が拳銃を構える。指揮を執る警察官が怒鳴った。

「これが最後の警告だ！ 武器を捨てなさい！」

元博は……走った。警官の一団へ向け。病院に戻るくらいなら死んだ方がましだから、だ。元博が行く。絶望が警察団に飛び込んで行く。突然、周囲で金切り声がした。

「どけ、どけえ！」

オートバイが——秋留善行がトルエンの売人から借りたオートバイがパトカーに激突し、炎上した。爆炎の中、ノーヘルメットの運転手がスリップする。秋留善行が。

倒れながら善行は叫んだ。

「今だ！」

元博も叫ぶ。

「今だ！」

ビール瓶を手に元博が警察団に飛び掛かる。善行はボールペン……テックスを右ポケットから抜いた。グリップをガッチリ握り、警官の眼球を次から次へとブツ刺して行く。

形勢逆転……そして価値観が逆転する。この世界は地獄だ。我々が生きるこの世界は地獄。地獄が逆転すれば、何になる？ あんたに聞いてるんだよ、読者さんよ。地獄が逆転したら何に変わる……何に変わる！！

答えろ！ さっさと答えるんだよ、馬鹿野郎！

12、フルスイング

闇の中、善行は考えた。世界の悪の根源はどこにあるのか。……俺は散々、悪い事をして来た。だが、あいつに比べれば、マシだ。禁欲を説き、恐怖ビジネスを蔓延させたあいつ。この世界で最も幅を利かせている、あいつ。あいつって、誰の事か分かるよな？

キリストの表情が豹変する。鈍い眼光を放つ不気味な表情に。

キリストが物静かに告げる。静かな……静か過ぎる声音で。

「禁欲をしなさい」

「ノーと言ったら？」

キリストは答えた。

「答えはイエス、だ」

言いながらキリストは机の上のペンを手にした。聖書の執筆を開始する。俺が立てた〈フルスイング計画〉の全貌。それはボールペン〈テックス〉で息の根を止める事。この世界の支配者に一撃必殺。勿論、フルスイングで。喉にペンを突き立てる。

テックスをキリストの左手甲に突き立てた。

「能書きはたくさんだ、キリストさんよ。あんたの偽善的な戯言は聞き飽きたぜ」

「……あ、悪魔よ、退け」

「悪魔じゃねえ、神だよ。俺こそが神なんだ。証明してやる」

呟きながら秋留善行は手甲に刺さったテックスを抜き、キリストに襲い掛かった。血走った眼差しで、白い歯を剥き出しにして。

漲る暴力衝動と野獣の本能。〈世界〉を変える。変えて見せる。

*

冴子は目覚めた。自室のベッドで。全身から〈痺れ〉は消えていた。身体が物凄く軽い。

自慰に耽る。耽りながら夢想した。過去に自分を虐めた女を。女は秋留さんと話している。秋留さんは橋の下、一緒にトルエンを吸うよう誘惑している。

女の名は——ヒトミ。かつて私が趣味で執筆した小説作品を破壊した、バカ女。

作戦は上手く行った。ヒトミはシンナーが吸いたくてウズウズしてるの。はいは〜い、みたいな。それに対し、秋留さんはニヤニヤしている。橋の下……チャプター1を目指し。

.....こんな愉快な話はないってば。だって秋留さんはこう言ってた。「だってよ、こんな笑える話はないぜ。質屋に行っても、サトウヨカドーに行ってもな」って。で、射精。テックスの特殊カバーを外して。

指先の動きが速くなる。私は.....イっちゃった。潮を噴いて、シーツがグチャグチャになって.....。

愛しのダーリン、秋留さん。彼こそが王に相応しい。だって彼が世界を変えたんだから。

「うっ！」

身悶えし、冴子は蹲った。う、産まれる.....未知の〈何か〉が。屈強の暗黒生物、テックス・ドラゴンが.....。

*

産まれたばかりのテックス・ドラゴンはじっと見ている。鋭く、ヤバイ目付きで。ボールペン.....ペニスをギンギンに勃起させながら、こちらを見ている。

モンスターが〈あなた〉を監視している。24時間、年中無休で。テックスをカチカチ、鳴らしながら。その音が聴こえるだろう。確かに、あなたはその音が聴こえている。カチカチカチカチ、カチカチカチ.....。

以後、世界がどう変わったかは分からない。私は私の果たすべきを果たした。それだけ、だ。

先手必勝、問答無用。三人が行く。絶望が、冴子が、秋留善行が。

赤いインクで書き殴る———食事の時間だ、血の滴るレアで頼むぜ！

野獣の咆哮が夜空を引き裂く。狩りは始まったばかりだった。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872